4　寺社・聖地・霊場

渡辺匡一

一　日本における仏法興隆と寺院の建立

遠くインド（天竺）の地に発した仏教は、中国（震旦）を経て日本（本朝）へと渡来する。本集本朝部は、国家仏教を草創した聖徳太子、民間仏教の指導者である行基による日本仏教草創神話によって幕を開ける（巻十一・1、2、3）。以後、中国僧道照（4）、道慈（5）、鑑真（8）等によって法相宗や三論宗、戒壇が伝来した後、空海、最澄、慈覚、智証等日本の僧侶の手によって天台（山門・寺門）・真言の顕密二教が日本へもたらされ、広く信仰されていった経緯が記される（9～12）。しかし、仏の教えを広めるためには拠点が必要である。以後、13～38話までの二十六話は、仏教興隆のために創建された寺社の縁起が連綿と語られ、仏の国日本の姿が立ち現れていくことになる。

巻十一・13～22話は、東大寺（13）・山階寺（14）・元興寺（15）・大安寺（16）・薬師寺（17）など、南都（奈良）七大寺を中心に編成される。大安寺は「中天竺舎衛国ノ祇園精舎ハ兜率天ノ宮ヲ学ビ造レリ。震旦ノ西明寺ハ祇園精舎ヲ移シ造レリ。本朝ノ大安寺ハ西明寺ヲ移セル也」とされ、天竺・震旦の聖地が日本においては大安寺として具現したことが確認される。また、元興寺は、北天竺生天子

国の化人によって造像された弥勒像が伝来することによって、やはり聖地の役割を担い、日本がインド・中国に劣らない仏の国であることを宣揚する。これらの寺院は聖武天皇（東大寺・元興寺）や天智天皇（薬師寺）、聖徳太子（法隆寺）や光明皇后（法華寺）など、いずれも天皇や皇族の手による建立とされる。藤原不比等の建立とされる山階寺（興福寺）も、「（元明）天皇ノ御願トシテ厳重ナル事無限シ」と、不比等ではなく元明天皇の御願による建立とされている（本集の独自文）。本集は、各寺院の建立を国家的なものとして位置づけることにより、王法・仏法相依を基調とした世界を立ち上がらせようとするのである。このことは、巻十二で語られる諸法会に国家的性格が色濃く打ち出されていることによっても裏づけられる。

24話以降、天智天皇による志賀寺（29）・大友皇子による笠置寺（30）を除けば、久米仙人（久米寺）・空海（金剛峯寺）・最澄（延暦寺）らの高僧や、坂上田村麿（清水寺）・藤原伊勢人（鞍馬寺）などの俗人による大寺院の建立譚が続くが、見渡してみると、藤原摂関家にかかわる寺院の建立話が一つもみえないことに気が付く。摂関家の建立した寺院は、14話の興福寺（鎌足）以外にも、法性寺（忠平）、楞厳院（師輔）、法興院（兼家）、積善寺（道隆）、法成寺（道長）、平等院（頼通）など、枚挙に暇がないはずである（『江談抄』）。楞厳院を取り上げた27話も、「慈覚大師始建楞厳語」（題）と、師輔ではなく慈覚の建立とされる。興福寺が元明天皇の御願によるという説と同様に、楞厳院を慈覚が建立したという説も他に類例がなく、本集の意識的改変とみられる。仏法興隆の起点ともなるべき寺院建立譚に摂関家をかかわらせない理由としては、王法と仏法が補完しあいながら世を統治していこうと

する、王法・仏法相依の図式に、摂関家という第三の権力が割って入ることを嫌ったためと考えられるだろう。寺院建立譚における摂関家の排除は、巻二十二の鎌足にはじまる藤原氏伝をあくまでも「公ニ仕ヘ」る者たちの列伝として強調していく姿勢とも呼応する。

国家鎮護の役割を担い、護持僧たちの読経の声の絶えない大寺院に対して、本寺・本山を離れ、諸国を流浪しながら修行に励む聖たちが踏み入る山野も、また仏法の聖地として立ち現れてくる。聖たちの多くは法華経持経者であるが、延暦寺を出奔し、多武峰に庵を構えて『法華経』を誦し念仏を唱えた増賀（巻十二・33）をはじめ、性空は書写山（同・34）、円久・好延は愛宕山（同・38、39）、良算は金峰山（同・34）、に庵を構え精進を重ねる。俗から離れ神仙的な雰囲気を漂わせる聖たちは、俗界の価値観に対しても自由であった。神明寺の睿実は道端に倒れ臥す病者を見過ごすことができず、円融院の治療を拒んだ（同・35）。大寺院での名声には見向きもせず、野に下って庶民へ救いの手を差しのべる聖たちは、菩薩そのものであった。都に立つ国家鎮護の霊場と、山野に現れる庶民救済の聖地の存在は、巻十一巻頭の聖徳太子と行基菩薩の話と呼応しつつ、仏の慈悲・功徳が国の隅々まで行きとどき、安穏なる世の具現を導くのである。

二　神社（神）の役割

寺院の建立が仏法興隆の歴史として高らかに称揚されるのに対して、神社の創建譚はまったく語られることはない。また、神（神社）の霊験譚も、仏法守護の力を称揚することはあっても、神の威徳

が説かれることはない。例外として、賀茂明神を信仰し、『法華経』観音品を読誦していた醍醐寺の蓮秀が死後一日で蘇生した話（巻十六・36）があり、観音信仰と賀茂信仰が習合した時代の状況をうかがい知ることができるが、話末「神ニ在スト云ヘドモ、賀茂ハ冥途ノ事ヲモ助給フ也ケリ」の表現からは、神や神威に対して肯定的な姿勢を看取することは難しいといわざるをえない。そもそも、朝廷と深くかかわり、数ある神社のなかでも重要な位置を占めていた伊勢大神や熊野権現についても、まったく語られていないに等しいのである。伊勢については、歌人大中臣輔親・能宣親子が伊勢神宮の祭主をつとめる家系であることが伝えられるにとどまる（巻二十四・53）。また、皇族・貴族たちも参詣していた熊野は、地名としては何度も登場し、霊場としてのイメージを伝えるが、熊野神が具体的に描かれるのは、道命阿闍梨の許に参じる諸神の一人として（巻十二・36）と、法隆寺の明蓮に夢告する神として（巻十四・18）だけである。

聖徳太子と物部守屋の戦いが象徴するように（巻十一・1）、日本は神の国から仏の国へと移行したのであって、仏法を標榜する本集においては、神は仏法を護る護法神の地位以上のものを与えられない。そのことは、寺院建立譚の多くに、神が顕れ、土地を禅譲し、仏法や寺院を護ることを宣言したことが伝えられていることからもうかがえる。神の棲む聖地は、仏の鎮座する寺院、霊場へと姿を変えていったのである。たとえば、空海は高野明神の案内で高野山へ上り、丹生明神に禅定の窟の地を譲られる。金剛峯寺が建立されると丹生・高野の二神は「誓ノ如ク此ノ山ヲ守」ったとされ（同・25）、徳道は神の夢告によって霊地を知り長谷寺を創建した（巻十一・31）。最澄は中国からの帰り、宇佐八

幡から守護を約束され（同・10）、慈覚と延暦寺は、中国から渡来した赤山明神によって守護された（同・27）。日本の仏法の要となった延暦寺には、仏法障碍（しょうがい）のためにインドの天狗が飛来するが、延暦寺の荘厳なる様に心打たれ、叡山僧明救に転生し、中国の天狗は慈恵僧正の供童子につかまって腰骨を踏み砕かれ、這々（ほうほう）の態で中国へと逃げ帰ることになる（巻二十・1、2）。

もちろん、黙って従う神ばかりではない。越後国国上山に棲む地主神は、山寺ができたために棲むことができないと、雷神に頼み塔を幾たびも破壊した。ところが、この山寺にやってきた神融禅師は『法華経』を誦し、その霊験によって雷神は緊縛され身動きがとれなくなってしまう。やがて地主神・雷神はともに山から出ていくことになる（巻十二・1）。この話からは、新興宗教である仏教と在地信仰の間に起きたであろう摩擦・衝突が透けてみえるが、『法華経』の霊験、仏法の力によって、荒ぶる神たちは押さえつけられる。仏法に帰依し、護法神となった神々は、やがて寺院（法輪寺）へと足を運び、僧侶（道命阿闍梨）の読経を聴聞して、法悦の涙を流すようになっていくのである（同・36）。

三　観音の霊場

荘厳な大寺院、深閑とした聖地とは別に、人々が群集し、賑わいをみせる寺院の存在も、注目しなければならない。巻十六には、貴賤上下を問わず信仰を集めた観音霊場の話がまとめて載せられている。全四十話に及ぶ観音霊験譚のうち、致富譚と延命譚で三十八話を占め（残りは極楽往生譚一話、蘇

生譚一話）、現世利益の仏としての面目躍如といった感がある。登場する霊場は、周防の三井観音（3）、丹後成合観音（4）、紀伊狭屋寺（38）、和泉珍努ノ山寺（12）、大和殖槻寺（8）、大和岡本寺（13）、奈良唐招提寺（40）、奈良穂積寺（10）、奈良下毛野寺（11）、京六角堂（32）、京賀茂明神（36）、近江石山寺（18、22）など、都に近い寺院で占められているが、もっとも多く登場するのは、長谷寺（19、20、21、27、28、29）と清水寺（9、30、31、33、34、37）の二寺である。ともに巻十一に草創縁起が語られており、「今ノ長谷ト申ス寺、是也。専歩ヲ運ビ心ヲ保チ可奉シトナム語リ伝ヘタルトヤ」（31）、「都□ノ上中下ノ人、皆、首ヲ低テ歩ヲ不運ト云フ事無シ。今ノ清水寺ト云フ、是也」（32）と、観音の利益の素晴らしさに、両霊場は参詣する人々が引きも切らない状況であったことが伝えられている。なかには清水寺に二千回参った青侍もいたという（巻十六・37）。清水寺へとむかう清水坂には癩者たちが集い、都におけるアジールでもあった（『清水寺験記』）。

『法華経』観音普門品（『観音経』）において、衆生の状況や身分に応じさまざまに姿を変え、救いの手を差しのべることを誓った観音のお告げを聞くために、人々は霊場へ殺到した。身よりもなく、今日の食事にも事欠く人々の願いをかなえるべく、観音はさまざまな霊験を現す。親類縁者もなく貧しいために夫ももてない京の女は、清水寺からの帰りに陸奥守の子息に見初められ（9）、九人の子を抱えた奈良の女は、妹に化身した穂積寺の観音から仏堂の修理費百貫を与えられる（10）。周防国の判官代は退庁したところを敵に待ち伏せされ殺されたかにみえたが、実は日頃帰依した三井寺の観音が身代わりとなったので、無傷であった（3）。人々の願いは切実であるがゆえに、ときには観音を

脅したり、お告げにたてついたりもする。「わらしべ長者」で有名な話（28）では、男は願いがかなわないならば長谷観音の前で餓死しようと脅迫し、観音が授けた一本の藁筋をもとに、次々と物を交換していくうちに富貴の身となる（28）。また京の女は、清水観音が授けた御帳を公然と突き返す（30）。観音霊場は人々の「生」の集約する場であり、人々の生へのあくなき思いと仏の慈悲が交錯し、光彩を放ち続ける場なのである。

【参考文献】

国東文麿「今昔物語の構成」（『今昔物語集成立考』増補版、早稲田大学出版部、一九七八年）
小峯和明「組織と世界認識」（『今昔物語集の形成と構造』笠間書院、一九八五年）
森正人「三国」（『今昔物語集宇治拾遺物語必携』学燈社、一九八八年）
速水侑「『今昔物語集』における霊場参詣勧進説話の形成」（『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年）
千本英史「栄海と清水霊験記」（『験記文学の研究』勉誠出版、一九九九年）